



その想い



第2号

発行人：谷泰智
27年12月1日発行

★ 護国寺の御札、復活しました！

ショクセイク

先代住職が長年に渡り属星供のお札を配らせてもらっていましたが、この度、装いも新たに手作りの御札が仕上りました。ご家庭のお仏壇内外、玄関、柱等にお納めください。



- 上の赤い真四角のハンコは篆刻と呼ばれる石のハンコです。住職がデザインしたもので当寺檀家の中山健さんに掘っていただき、一枚一枚押しております。

真ん中の字はカーンマーンと呼び、梵字の二字が一つになって不動明王を表します。両脇の字体は篆書体（てんしょたい）といい、古代中国の印字体です。右側から読むと『見我身者 発菩提心』（我が身を見るものは菩提心をおこす）という意味になります。

- この御影は、当寺の本尊不動明王を昭和4年に写し彫ったもので、先々代住職であった山岡晃英和尚の甥御にあたる山岡政雄様が、長らく所蔵されておられました。しかし平成25年1月に政雄様が逝去され、御子息の山岡宜彦氏の御厚意を以て、当寺に還座される運びとなりました。

縦62cm、横25cmの大きさの原板を紙に刷り、当寺檀家のセルクルデザイン工作室岩本やよいさんのお力を借り、デジタル化して縮小したものです。土佐国大瀧山とは護国寺の山号です。

- 字は住職が手書きしたものを印刷しています。
- 緑の字は平成28年度の干支であるヒノエノサルと書いています。
- そして、なんと紙はすべて仁淀川の和紙で出来ています。紙を漉いていただいたのは、土佐市新居に御座す、当寺と同じく本山修驗宗の池浦寺後嗣の田村啓寛さんです。啓寛さんは土佐和紙を現代に伝える一流の職人さんとしても活躍されています。

★ 大瀧山でヨガをする日、無事終わりました

先月22日（日曜日）に加茂大瀧山の山頂においてヨガを行いました。

加茂弘岡在住の山本順子先生を講師に迎え、初心者でも無理なくでき、芯から心地よくなれるヨガが総勢19名で開かれました。

前日まで天候がどうなるか怪しく心配しておりましたが、老若男女晴れ男晴れ女の参加者の方々に恵まれ、その日一日は雨が降らず、また転落やケガなども無く、気持ちよく下山することができました。

9時過ぎに護国寺を出発し、10時頃山頂に着き、そして10時半から12時までヨガ。各自持参のお弁当を食べて、13時から14時半の下山まで山頂付近の散策や、自由瞑想という日程でした。

私にとって初めての企画であり、不安も多々ありましたが、山本先生にアドバイスをいただき、また、同じ宗派の大先輩が草刈りに駆けつけていたり、周囲の力に助けられて自分も精一杯準備に奔走できました。

何故、大瀧山でヨガをやろうと思ったか？ その理由は、そもそも護国寺は、1300年の歴史を持つ修驗道その一寺院であり、修驗道とは本来が大自然の山中に入り、そのなかであらゆる生命の営みに神や仏を見出し、自身を見つめ直し、驗徳を顕すという宗教活動を成すものでした。

しかし、近年日本各地の里山は荒廃が進み、豊かな自然の営みは重たい影に覆われています。そんな中、我々修驗道の僧侶は、ただ習わし通りに山に入り、そこに神仏を崇めるという行為だけでなく、自然の再生を手助けする活動も視野に入れるべきではないかと私は考えております。

その活動の第一歩として、まずは広く山のことを知ってもらうところから始めようというのがこの行事の狙いででした。次回はドウダンツツジの咲く4月に予定しております。興味のある方は是非お問い合わせください。



★ 回りて向かう～供養のあれこれ～



● 法事のマナー

学校では教えてもらはず、大人になり社会で揉まれてゆく中で、人が自然と学んでゆくもの、それが冠婚葬祭に関する様々なしきたりやマナ一ではないでしょうか。

しかし、それらは地域の風習やその場に関与する宗派の違いによって、同じ事柄の意味が180度変わることもあります。結婚式などの慶事に於いては、少々の行き違いがあったとしても、笑って済まされることになるかと思いますが、逆に忌み事に於いては、場を気まずい雰囲気にしてしまうこともあります。

僧侶の立場として、よく質問を受けるのが、のし袋の水引の色についてです。色は大きく分けて赤白、黑白（銀白）、黄白とあります。例えば皆さんのが参加者として、葬儀で用いるのは黑白（銀白）は当たり前のことですが、四十九日は黄白か黑白、どちらでお家の方に渡したらよいのか、と結構悩まると思います。その答えは・・・実はどちらでも良いということになります。

この問題は四十九日というものをどう捉えるかによって二つに分かれます。四十九日法要は別名、満中陰とも呼ばれチュウイン（亡くなられた方の存在は肉体でもないし、まだ成仏もしていない状態）の期間が無事満ちたことを、ホッと安堵しこれからは亡き方へ善業を向ける供養なのだとして、赤と黒の中間として黄白を用いる考え方かた。もう一つは、この法要を済ますまではとにかく喪中であり、法事が始まる前に祭壇にお供えするのだから黑白が適切であるという考え方かた。

さて今度は、僧侶にお布施として渡す場合の色の違い。これは特に葬儀の場面でのことかと思いますが、赤白なのか黑白なのかという疑問があります。全国的に見ると、この場合は本来水引自体が不要であるとする考え方や、僧侶にも黑白を使うのが本當であるとする地域もありますが、高知県においては黄白か赤白が多いと感じます。

葬儀でのお布施に赤白の水引を用いることに、かなり抵抗を感じる方が多いと思いますが、これは『戒名料としてのお布施』という考え方が浸透したものだと思われます。戒名を授かったことで、確かに仏さんと御縁が結ばれて、無事に成仏が約束されたという慶びと解釈することができます。ちなみに生前に戒名を受ける得度式は、佛教界に於いて大変慶事であると認識されています。

以上のような地域の状況を踏まえていただき、参考としてもらえばと思います。私個人としては、葬儀で頂くお布施の水引は黄白が望ましいかな・・・、と思いますが皆様の判断にお任せしております。



● 精進料理とは

精進とは、サンスクリット語のヴィリヤーを漢語に意訳したもので、ほぼ日本語の努力と同じ意味になります。つまり単純に置き換えると努力料理と言えますが、なぜ努力料理を故人様が召し上がるのか？、それは「故人様も成仏して諸仏の御仲間になっているけど、より多くの様々な仏さんに出会うために未だ修行の旅を続けているよ。」という観念に基いています。

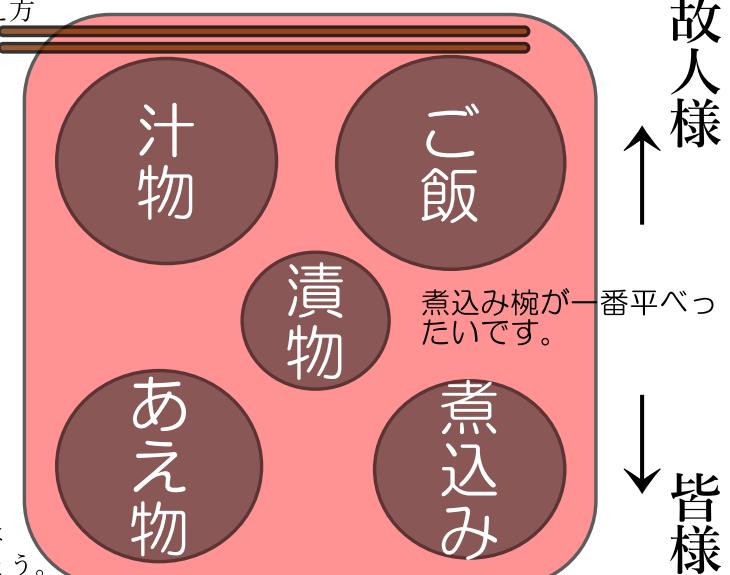
つまり精進料理とは修行者の食べ物なのです。修行とは厳しいことをするのではなく、結果的に厳しくなるものなのです。では何をするから厳しくなるのか？それは自分自身の存在を徹底的に見つめ直すからなのです。

私たち人間は、物理的に存在するためには食物と水分を必要とします。これらは体外から摂取しなければならず、そのために何かを捕食しなければなりません。精進料理とは何も動物と魚を使わなければ良い、というのではなく、本来は植物だって殺したくないです。しかし、「人間は何かを殺さなければ生きていけない。それならば、最低限の殺生でこの身の健康を保っていこう。」という実践的な考え方が佛教精神の根本にあります。

無殺生を極端に突き詰めれば、インフルエンザのワクチンの製造過程では鶏卵が利用されていますし、家畜の髄液から作られるゼラチンは家屋のフローリングや化粧品の成分の一部に利用されています。自らの生活の周囲に常に目くじらを尖らせながら生きるのも個人の自由ですが、お釈迦様はあまりの極端を戒めました。

現代は飽食時代となって久しいですが、食べ物への感謝は薄れてきているように感じます。日本語の『いただきます』は神様仏様に対しての感謝ではなく、料理するために殺された動物植物への感謝をあらわしています。欧米人からしばしば無宗教と言われる日本人ですが、一日三度、無意識に仏教的になる瞬間が日本人にもちゃんとあるのです。

もし、どうしても故人様に肉魚をお供えしたい場合は別皿に入れて、その気遣いの気持ちだけ召し上がってもらいましょう。そして、お下がりとして美味しく残さず食べてあげましょう。



★ 檀家さんに聞く



この加茂の里に、もはや全国区で名の知れたバイカオウレンの群生地があります。

『森の妖精』とも呼ばれるその繊細で可憐な花を、有志の方々と共に守り、また多くの人々にその素晴らしさを紹介する活動をなさっている、ある檀家さんを紹介します。

①・・・山脇さん
②・・・住職



加茂本村在住の山脇弘之さん

大学を出て以来デザインと物づくりの仕事に携わり、現在は牧野富太郎博士の志を継ぎながら、

地域発展の為のイベントを多数企画、実行されています。



①もう全国区で知られるようになっちゃうので、普段は人が通らんけど、2月3月になったらどっさり人が来ます。銀座ばあ混んでますよ。(笑)

②このバイカオウレンは全くの自生ですか？たくさん人が来ると盗掘されたりせんですか？

①ええ、そうです。盗掘は、やっぱり最初の頃はあったけど、7、8年前から、ウォーキング会の仲間みんなで環境を守る取り組みを進めて、土地の持ち主お二人に許可をいただいて、以前よりももっとオープンに見せだしたら、逆にもう採られることはなくなりましたねえ。

②山脇さんがバイカオウレンに関わるようになった経緯を教えて下さい。

①7、8年くらい前からバイカオウレンの名前が有名になってきて、群生地を探し回りよったら、こんな近くでこんな素晴らしい場所があるのを知って本当にビックリしました。バイカオウレンを知った時に県立牧野植物園のシンボルマークがその葉っぱなんやと気づいて、そこから牧野富太郎先生に関する本を読み漁って、佐川にこんな凄い人がおったんだということを改めて知りました。そこから徹底的に牧野先生とバイカオウレンの事を研究して、バイカオウレンのクリアファイルを商品開発したら、それが植物園にとても気に入ってくれて、今はいろんなところに納品させてもらっています。調べよって感動したのが、牧野先生の手記に書いてある乗台寺さんの近くの金峰神社の境内の中に咲く少年時代からの想い入れのあるバイカオウレンが、この現在も同じ場所で咲いているのを知って、「これは・・・！」という想いでしたねえ。



②どうして佐川町と日高村にバイカオウレンは集中しちゅうんでしょうか？

①この加茂の地域は、近隣の6町村間での、かつてのジオパーク構想に編入されるほど、特別な地層ながです。年代で言えば、ジュラ紀、シルル紀、日高は四億年から3億年、佐川は二億年から1億5千万年、大昔に大陸がぶつかり合って隆起を繰り返して、その遙か大昔の地層が地面に露出してます。そして植物と地質地層は凄い関係してて、そのことがこの加茂の地域にだけバイカオウレンの群生地があることの理由やと思います。

②住み慣れた郷土がそれほど特別な環境やとは、バイカオウレンを通じて再発見しました！

①いろんな条件が重ならんとバイカオウレンは育たんがやけど、谷合で霧があって、適度な光（木漏れ日）、湿度、風、杉と檜の間伐されたシダの生えてない土地。こここの群生はどんどん広がっていきゆがです。



面白いのは、決してバイカオウレンは中国の花じゃないですよ。花が梅に似てるということで梅花黄蓮と名付けられたんですけど、白い部分が花弁に見えるけど、厳密にはその中の小さな黄色い部分が本当の花で、白い部分はガクになります。それで不思議なことにこの花は『五』にこだわりがあるみたいで、緑の葉っぱもその白いガクも黄色い花も、みんな五枚なんですね。

②うーん・・・、五は仏教でも重要な数ですねえ・・・興味深い！ところで毎年開かれゆうウォーキングはどんな内容ですか？

①去年はここに、ビスコッティという高知の若者の間で有名な歌手の方を招いて、100人ぐらいのコンサートを企画しちょったんですけど、残念ながら雨できんかったです。例年は牧野植物園の稻垣先生に説明をしていただきながら、撮影会をしたり、近くの史跡を巡ったり、足湯をしたり、郷土料理を食べたりと盛りだくさんです。来年はなんと、城西館さんのツアーで県外からも多数の方に来てもらう予定になってます。今までの訪れた方は、「何となく世界観が違う。」とか「空気が全然違う。」とか皆さん言うてくれますね。やっぱりバイカオウレンは自然の中で鑑賞するのが一番！

②最後に、バイカオウレンや牧野先生を通しての山脇さんの想いを教えて下さい。

①元々は漢詩からきてますが『結網学人』という牧野先生が好んだ一句があります。

世の中には、椅子に座ったままどうのこうの言うだけで、やってみもせんで、「どーセ無理・・・」と結論をだしてしまうことが、この時代でも未だに多すぎると思うがです。それよりも、『とにかく先ず行動を起こして、もし失敗しても、それを経験にまた違うやり方で行動をしようよ！』と。

私は徒党を組んでやることがあまり好きじゃないし、指導力もないで、自分で企画して、無理のいかん中で楽しんでイベントを実行しています。

②良いお話を聞かせてもらいました。有難うございました。



※『結網学人』・・・魚を捕るためにあれこれ考えるよりも、まずは網を結いなさい。という教え。

お経のことば



ああ、友よ、まさにその時、私はあなたにその宝石を与えていたのだ。

その時、宝石を衣服の縁にこのように結び付けておいたのだ。

ああ、友よ、しかしながら、あなたは、「わたしのために何が結び付けられているのか？あるいは

誰が結び付けたのか？理由は何なのか？」

と、実に調べることもなかった。ああ、友よ、苦労して食べ物や着るもの求めながら、

その得たもので満足しているあなたは愚かである。

妙法蓮華經 五百弟子受記品第八

植木雅俊 訳

妙法蓮華經とは紀元0年頃から100年頃にかけて成立したと言われる、28章からなる大乗佛教の經典です。前回紹介した原始佛教のお経に対して、今回は大乗佛教のお経を取り上げてみました。大乗とは、出家した僧侶だけではなく老若男女あらゆる職業の人々が共に悟りを開くための教えです。妙法蓮華經と言えば、日蓮宗や創価学会の信者の方だけが唱えるお経として世間では思われるがちですが、事実はそうではなく、天台宗、真言宗、禅宗など多くの宗派で日常唱えられています。

上のお経のことばに至る経緯を説明しますと、お釈迦様の説法を聴きに来ていた500人の弟子たちが、「あなたたちも将来私と同じ仏になるんですよ。」という予言を受けたことで無上の歓喜を興し、ある例え話を以てお釈迦様の聖なる徳を讃えるという場面になります。その例え話とは、〈ある男が友人の家で美味しいごはんとお酒を御馳走になって、そのまま気持ちよくなつて寝てしまった。友人は用があつて先にいなくなるので、男が目を覚ました後も食べるものに困らないように、値段を付けることもできないほど高価な宝石を男の衣服の縁に結び付けておいた。やがて目覚めた男は旅に出る。しかし、友人がせっかく結び付けてくれていた宝石に気づくことなく、苦労を重ねやつとの思いで得た食べ物を、それが自分にとって最高のものであると思っていた。そんな時、男と友人はバッタリ再開する。〉というものです。再開した時、友人が男に対して言ったのが上のお経のことばです。

まるでメーテルリンクの青い鳥のようなお話ですが、この例え話に登場する男とは我々凡夫であり、友人はお釈迦様を暗に示しています。それではこの宝石とは何を示しているのか・・・、それは我々が本来具えている『仮性』なのです。仮性とは聞き慣れない言葉ですが、字の通り『仮の性質』ということです。そしてそれは森羅万象のあらゆるものに本来具わっているとされています。しかし残念ながら、特に人間はそのことになかなか気づけないです。仮性とはいろんな説明ができますが、私はよく『仮性を開く』という言い方をしています。思うに仏教的な精進とは、修行や研鑽を通して、何かを自分のものとして積みあげることではなく、我々が生きる日常のなかでどれだけ仮性を開くことができるか、そこにあるのではないでしょうか。

我々の日常はふとした仮性の輝きに満ちています。春夏秋冬自然の美しさ、家族からの無償の愛、友人同僚からの思いがけない^{イタツ}勞り、戦争を嘆く平和への祈り・・・、これらは見返りを求めてあるのではなく、さらに言えば、そこに「私が！私が！」という主語、つまり『我欲』があるのではないです。美しいと心から思った時、その心はもう美しいものと同じなのです。平和を願い心から祈る時、その心は愛に満たされています。

How manyで量ることのできない無量の仮性、それを少しでも広く開かれたものにしていく。そんなことを考えながらも、一方では感情の波に左右されてしまう毎日の私ではありますが、大事なことは、私が何らかの穢れなき崇高なものに変わることでは決してなく、お釈迦様が教えてくれた仮性に『気づき』ことなのだと念じ、このお経を唱えております。

● 3月21日 月曜日（振替休日） 献茶彼岸会

お位牌を持参いただき、お抹茶を献じて供養をします。

● 4月24日 日曜日 大瀧山でヨガをする日

標高247mの大瀧山の頂上にてヨガをします。

● 每月28日 柱源護摩供

本堂の護摩壇で炎を上げて祈祷と供養をしています。
午前9時と午後3時の2回です。

※葬儀が重なると変更される場合があります。ご了承下さい。

護国寺

781-2155

高知県高岡郡日高村九頭291

☎ 0889-24-7244

仏事に関するお悩み、ご質問、
行事に関するお問い合わせ等、
お気軽にお電話ください。

